

ポスト1960年代のワーキングプア ——レイモンド・カーヴァーの作品を読む——

栗 原 武 士*

序

今回の研究報告では、現代のワーキングプア
の先駆けともいえる、1970年代～1980年代アメ
リカの労働者階級の日常を描く短編作家、レイ
モンド・カーヴァーの作品をとりあげ、当時の
労働者階級に属する登場人物たちの精神風景を
階級・ジェンダー・人種という複合的な視座から
検討した。

非白人による公民権運動、フェミニズムの台
頭、経済の落ち込みといった1960年代以降の社
会的変動の中で、基本的に保守的な価値基準を
持つカーヴァーが理想的な自己実現を果たすこ
とは容易ではなかった。経済的、階級的、人種
的に理想的とされる男性像を体現することがも
はや不可能に近かった当時のアメリカにおいて、
労働者階級に属する白人男性であるということ
はいかなる意味を持つのか。今回の報告では、
当時のアメリカの社会的／文化的な地殻変動に
対し、カーヴァーが作家としてどのような回答
を提示しているのかを読み解き、翻って、棲み
難い現代日本に生きる私たちの日常へのささや
かな処方箋を求めたい。

I. カーヴァーの保守的男性性

本研究報告では、まず文学テキストと、その
外部（作家・作品の持つ社会・文化的背景）を

どのように文学批評に取り込むかをめぐり、こ
れまでの文学批評理論の変遷を紹介した。発表
者はこれまで、レイモンド・カーヴァーの作品
群を、作家自身の自伝的背景を色濃く反映した
ものであるととらえ、主に男性論的アプローチ
（社会一般の「男性性」「男らしさ」の価値基準
や一般的通念がどのように生まれるか、またそ
れらの価値基準に基づく男性ジェンダーロール
が現代社会の男性を精神的に拘束する様に着目
する手法）を以って彼の作品群を分析・批評し
てきた。同時に、社会学・階級論的アプローチ
（現代消費文明がいかに現代アメリカ市民を消費
者として規定し、彼らがそのルールにどのよう
に盲従するかに着目する手法）を以って、男性
論のみならず、カーヴァーの登場人物たちの精
神状況を社会的要因に還元する批評も試みてき
た。本研究報告においても、作品を中心に、文
学テキストの外部を補完的に批評に取り込み、
カーヴァー作品の本質的な価値を紹介した。

カーヴァーが持つ理想的男性像と、その幻滅
は、報告の冒頭で紹介した詩“The Car”に端的
に示されている。語り手は48行に渡り、いかに
自分のクルマがボンコツであるかを幾分滑稽に
叙述する。しかし、この詩にはカーヴァーの
ユーモアとともに語り手の深い絶望が込め
られている。なぜなら語り手は最後の二行で
そのボンコツを“Car of my dreams. / My car.”
（*Ultramarine* 20）と呼び、クルマの崩壊に自己
の人生の夢の崩壊を重ね合わせているからであ

* 広島経済大学経済学部講師

る。多くの場合カーヴァーの詩は自伝的事実に基づいていること、さらに実際彼がボンコツを所有していた自伝的事実などを考慮すれば、この詩の語り手はほぼ作家自身であり、クルマの崩壊が象徴しているのはカーヴァー自身の人生の夢の崩壊であるといっておかしいだろう。さらに言えば、一般的に男性的領域に属する自動車の機械的な部分への言及は、彼の夢が基本的にジェンダー化された概念であることを示唆し、彼の伝統的な男性観の一端を示しているといえる。

カーヴァーは南部の家系に生まれ育ち、男性が家長として一家の経済を支える伝統的・理想的男性像を、鋸の目立て職人として製材所に勤務する労働者である父親から受け継いだように見受けられる。カーヴァーと父親との精神的な結びつきは、釣りを題材とした彼の詩から読み取ることができる。例えば“Bobber”において、語り手の少年は寡黙に釣りに没頭する父の姿を、幾分ロマンチックかつヒロイックなものとして回想している。家族の為に食料を得る釣りという前近代的行為は、カーヴァーの作品中でしばしば家族を養う伝統的な男性性の象徴として描かれることが多いが、“Bobber”においても、釣りの達人としての父の姿と、それを継承する息子という、伝統的な男性像の世代間の継承が賛美されている。

II. 理想的男性像とその幻滅

しかしカーヴァーの作品は伝統的な男性性ながらもはや通用しないポスト1960年代の社会状況を反映するかのようになり、彼自身が内包する理想的男性像の幻滅をも描いている。父の姿を描いた詩“Photograph of My Father in His Twenty-Second Year”では、努めて男らしく振舞おうとしていた父親の気弱さが明らかにされ、さらには父と同様、語り手もまたアルコール中毒に苦しみ、釣りという男性的行為すらできない状態

にあることが示唆される。このことは、アルコール中毒で瀕死の状態に陥り、さらには貧困から二度の破産を経験するなど、従来の理想的男性像から逸脱した人生を送ったカーヴァーの自伝的背景から生まれたものであろう。詩“The Car”の語り手と同様、“Photograph of My Father in His Twenty-Second Year”の語り手もまた、男性としての理想的自己実現の失敗に罪悪感と羞恥心を持つ、ポスト1960年代のワーキングプアの姿を垣間見せているのである。

短編“Vitamins”において、カーヴァーは労働者階級の男性の精神的荒廃を、労働者倫理の喪失と白人性の失墜という二つのテーマに絡めて描いている。語り手は病院の清掃夫として低賃金で働く男性で、妻のパティはビタミン・サプリメントの訪問販売をしているが、まったく売れずに、口論ばかりの夫婦関係は冷え切っている。作品中で、語り手が仕事に出かける場面は描写されるものの、仕事の内容にはまったく言及されず、ただ一行の空白の後、語り手の浮気が描写される。このことから、語り手が仕事にまったく敬意を持たず、伝統的な男性性を志向する理想的自己実現とは程遠い地平に住む人物であることが分かる。主人公はパティの同僚ドナと黒人バーで逢引するが、ベトナム帰還兵の黒人ネルソンに暴力的に恫喝され、性欲を失って自宅に逃げ帰る。貧乏白人が金満黒人に去勢されるというこの短編のプロットは、語り手の男性性だけでなく、特権としての白人性の喪失をも端的に表している

もともと差別的な人種観から生み出された理想的な白人像によって精神的に拘束される語り手の姿を、白人のエゴの結果であり自業自得だと断ずるのは確かに容易である。しかしその一方で、そのようなパラダイムが規範として機能している現実が存在する以上、労働者階級に属する白人男性の精神的苦痛を解消することは、人種主義そのものを無に帰すのと同程度に困難

なことといえる。カーヴァーは“Vitamins”において、現代アメリカが抱える人種主義の病巣の深さと、白人男性としてのアイデンティティの喪失、ひいてはまっとうな男性としての理想的自己実現の失敗という現実を直視して生きていかざるを得ない人々の痛みを作品中に描いているといえよう。

III. 理想的自己実現からの肯定的逸脱

短編“Vitamins”は、ポスト1960年代の労働者階級に属するアメリカ白人男性の一面を、端的に反映するものとも言える。このようなカーヴァーの作品群は、これまで人々の目に触れることのなかった底辺のアメリカに光を当てたという点で、一定の政治的価値を持つ文学作品だといっていい。しかしながら、カーヴァー作品の中でも真に評価されるべきは、そのような理想的自己実現という精神的拘束から肯定的に逸脱／逃走する人物を描く作品なのではないだろうか。すなわち、伝統的・理想的男性像からの逸脱を、否定的に嘆き、羞恥心や罪悪感を抱くのではなく、そこに新たな価値基準の創造と、押しつけられた社会規範からの跳躍を言祝ぐ、自由で解放的な精神を見出す作品群である。本研究報告では、その例として短編“Elephant”と短編“Menudo”を紹介した。

労働者階級に属する白人男性と思しき短篇“Elephant”の語り手は、家族からの無心に応え、彼らへの仕送りを続ける。この点において彼は家長の責任を重んじる典型的なカーヴァーの男性登場人物であるといえる。しかしその一方で、ふがいない家族への仕送りを工面するために、彼自身、外食はおろか、歯医者の治療費や生活用品の購入費も削らねばならないほどの貧困生活に陥っており、家族への不満を募らせる毎日を過ごしている。すなわち語り手もまたカーヴァーの他の男性登場人物と同じように、物質的に豊かで家族へのサポートも十全にこな

せる理想的男性像と、自らの現状のギャップに苦しんでいるのである。

しかし、或る晩に象のように力強い父親の夢をみた翌朝、語り手は突然気分が晴れ、自由で解放的な感覚を獲得する。語り手は家に鍵も掛けず、弁当とポットに入れたコーヒーを携え、徒歩で職場に向かう。道すがら、語り手はこれまで見下していた家族全員の幸福を祈り、拾ってもらった同僚の車でハイウェイを疾走する。

結末部に描かれる語り手のエピファニーは極めて感覚的なものであり、作品に底流する論理構成では十分に説明することが難しい。しかし自己犠牲のもとに家族への仕送りをする自らの姿と、力強い父親の姿を重ねることで、語り手が自尊心を回復したという可能性は否定できないであろう。ここにおいて、語り手の家族への支援は伝統的男性ジェンダーロールという外的要因に拠るものではなく、極めて主体的な行為へと変貌する。それと同時に語り手は、物質的成功の追求というアメリカ消費文明に膾炙する社会規範からも解放されるのである。

このように、社会規範を脱却することで精神的な拘束を脱する登場人物は、カーヴァーがキャリアを通して描こうとしたテーマの一つであり、一定の文学的評価を受けてしかるべきものである。短篇“Menudo”においても、不倫関係に悩む語り手は、伝統的家庭像を実現できなかった罪悪感から不眠に陥っている。彼は物語の結末において、自宅のみならず隣人バクスター家の庭まで落ち葉拾いをするという、一見風変わりな行為に没頭することで精神的健康を回復するが、そのような奇行に走る語り手に対し、隣人バクスター夫妻は咎めるでもなく、肯定するでもなく、適度な距離を保ちつつコミュニケーションの回路を維持している。

“Elephant”と“Menudo”という二つの短篇に通底するのは、伝統的な価値基準をもとに作り上げられる社会規範から逸脱した、いわば他

者的な自己,あるいは家族や隣人に対し,寛容の心をもって受け入れ,コミュニケーションを保とうとする精神性である。そのような,保守的な価値体系から跳躍し,解放的で自由な精神を獲得するカーヴァーの語り手たちは,社会規範から逸脱する他者的存在を断罪する為に用いられた,ポスト1960年代の保守イデオロギーへのアンチテーゼとしての政治的価値を有している。現代でいう「ワーキングプア」と呼ばれるような社会的階層に生きながら,肯定的逸脱者としての「他者」への信頼を描いたカーヴァー

の文学的姿勢は,現代日本に生きる我々にとっても示唆するところが多いのではないだろうか。

参 考 文 献

- Carver, Raymond. *A New Path to the Waterfall*. New York: Atlantic Monthly, 1989.
———. *Cathedral*. 1983. New York: Vintage, 1989.
———. *Fires: Essays, Poems, Stories*. 1983. New York: Vintage, 1989.
———. *Ultramarine*. New York: Vintage, 1987.
———. *Where I'm Calling From: New and Selected Stories*. New York: Atlantic Monthly, 1988.